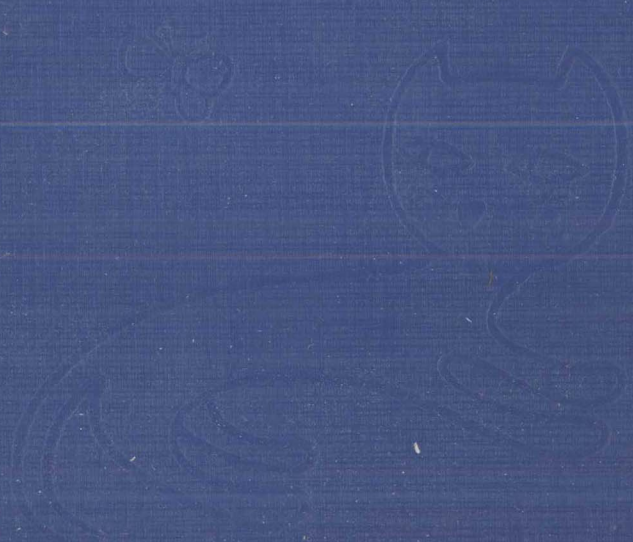


10

少年少女のための

現代日本文学全集



武者小路實篤集
有島武郎

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

NDC 918.6

少年少女のための

現代日本文学全集 10

武者小路實篤・有島武郎集

定価 二五〇円

昭和三十年六月十月初版発行

昭和三十三年二月二十五日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東西文明社

営業所 千代田区神田神保町二ノ二

印刷 松沢印刷株式会社
製本 帯郷製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることが出来ます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もつとおとなになってから読んだほうがいい部分をよくむものは、その一部をとつてのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくようして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといつても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このまゝを原作と考えても、さしつかえがないと思つております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によつて書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしろしてくれておりますのできつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであります。

編集者 久松 潜一

伊藤 整

福田 清人

本文中、唐（むかし）のように、かっこの中に小活字で入れてゐるのは、編集部でつけた字です。

武者小路實篤集もくじ

桃源にて	七
だるま	二六
わしも知らない	三
土地	四
優しい心	七
馬鹿	八
美人とその忠僕	九四
解説 十返 肇	一〇九



Ter.v

有島武郎集もくじ

一房の葡萄	二五
溺れかけた兄妹	一三三
火事とボチ	四一
小さな者へ	一五四
カインの末裔	一六七
ドモ又の死	二〇四
解説 十返 肇	二二七

そうてい 青山龍水
カッ ト 山本耀也



武者小路實篤集

桃源にて

所

支那

時

むかし

人物

男

少年（あとで武人）

少女（あとでその妻）

老人

その他

第一幕

少年 流れてゆけ、もの花。そして都にいる人にとす

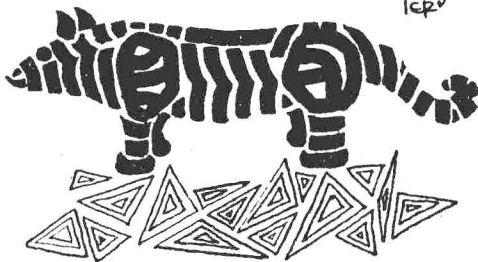
けてくれ。この山のおくに私たちがさいていますって。そしておにいさんの今までの苦心を都の人に語っておくれ。流れる水よ、私もおにいさんにまけないだけの仕事をしてみせる。私はまたいい所を見つけて、いたる所にうめの花をさかせてみせる。

男（登場） おまえは何をしているのだ。

少年 ももの花の流れているのを見ているのです。おにいさんどこにいらっしゃったのです。

男 山にも、もを植えに行っていたのだ。一本でも多く、ももの木を植えたい。なえどこのももの芽ばえは早く自分の居所に根をはりたがっている。そして私に植えてくれ植えてくれと言うからね。

少年 おにいさんはこんなに、ももの木を植えて、まだ植えたりないのですか。



男 そうさ。どんな仕事だって、上には上があるものだ。

そしてこれでいいということはない。まだあの山に千本のもの木が植えられるだろう。あの川岸にもまたも、があるほうがいい。まだおれの一生をかけても、おいつかないほどの仕事がついてくる。

少年 しかしおにいさん。天下にこんな美しいもの、山があるでしょうか。

男 ないかもしれない。あるかもしれない。しかしまずまず美しくすることはいくらでもできる。人間の力の限りをつくしたら、この山の何倍も美しい山をつくりだすことができるだろう。ただそういう人がこの世にはいないだけだ。私はこの仕事をやりだした以上は美しい上にも美しくする。そしてこんなにも美しいもの、山を見たことはないという仙境をつくってみる。見る人はおどろくだろう。そしてこの世にいるとは思わないだろう。この世にはいくらでも美しいものがある。その真価値を生かしさえすればどこだって仙境はひけるものだ。

少年 私はおにいさん。おにいさんにまけないような、

山をさがして、満山をうめの林にしてみせます。

男 しかしこの仕事は楽ではない。ただも、を植えればいいというのではない。土質や、地形をよく見なければならぬ。それよりやっかいなのは前からはえているいろいろな木だ。私は山火事に焼かれたこの山を見つけて、仕事にかかってからきょうで二十三年たつ。みんな、私のことを気ちがいだとか、仙人だとか、隠者だとか言っていた。私のその間の苦心はなかなかたいへんだった。おれは二度とこの仕事をしようとは思わないうらいだ。ただ私にはほかに仕事がなかった。絵もかけない。詩もつくれない。学問もできない。もちろん、今この世に得意になっている男ぐらいなことではあるだろうが、それが男子の仕事としておごれるかどうか。私は天下に類のない、私でなければできない仕事をさがした。さいわい私は比類のないじょうぶなからだだ、それ以上に根気のいい性質をもっている。それに私はどうしてか、も、の花を前生からの因縁のように愛している。だから私はこの仕事をしたのだ。おまえは私とちがって、からだも弱いし、ほかに才もあ

る。私の根気と、目的に忠実な点だけはまねるがいいが、こんな仕事はまねしないで、もっと自分に適当な仕事をおし。

少年 おにいさん。ほんとうにそうおっしゃれば、これだけのことをするのはたいしたことでしたらうね。

男 まあ、すきだからできたのだ。またほかに才がなかったからできたのだ。私は初めの二三年はよろこんでこの仕事をした。そのときは希望に燃えていた。だがついでおこる困難と、それにもましてこんなことをしていてもいいのかしらん。天下はみだれていて、多くの人は焼け出され、あるいはうえ死にしているのに、自分だけはのんきにこんなことをしていいのか。

自分も剣をとるのがほんとうではないかと思ったりした。また自分の力と、自分の根気をもってしたら王になれないともかぎらない。そしたら何万人の人をつかって、一朝で自分の今できない仕事をやってのけることもできるのだとは思わないこともなかった。しかし私は、そういう僥倖(きやうこう)の世界へはい入るのはいやだった。他人をまたつかうというのも自分の性質には

向かなかった。自分はだれにもかえりみられずに、こつこつ仕事をするのがすきだった。それから私は五六年の間は、ただ働いていた。せっかく植えた木の芽を、かやうさぎにやられてがっかりしたこともあった。虫がついて全滅したこともあった。だが私はこの道よりほかに、自分を生かす道があるとは思えなかった。それでやっとここまでやりとおしてきた。

少年 私もおにいさんから招いてくださっても、こんなに美しい世界を見るとは思いませんでした。あのうげにのぼってこの世界が一目に見られたとき、私はどんなにおどろき、どんなによろこんだでしょう。世界じゅうの人にこの世界を見せたく思いました。見せたらどんなによろこぶでしょう。

男 私はまだ世界じゅうの人に見せたいとは思わない。

私のゆめのうちにさいている世界はこの世界より何倍美しいかもしれない。もう十年か、二十年、私は、だれにも知られずに、人々のよろこびをつくっておきたい。

少年 そのときはみんな、どんなに喜ぶでしょう。

男 どれ、もう少し植えて、それから昼飯を食うとしよう。

少年 おにいさん。ぼくにも手つだわしてください。

男 昼飯を食ったら、つれていってやろう。おまえには私のあととはついてこれない。私はこれからあの山まで急いで行ってこなければならぬのだ。それが私のけさの日課なのだ。私は自分のきめただけのことはどんなことがあってもやることにしているのだ。

少年 それでは飯を食ったあとつれていってください。

男 飯を食ったらつれていってやる。(退場)

少年 (あとを見おくり) あれでなければこんな仕事はできないのだな。

(少女あわてて登場。)

少女 早く私をかくしてちょうだい。私は悪者に追いかけられているのです。

少年 あの家のなかにかくれていらっしゃい。

(少女かくれる、あらくれ男四五人登場。)

甲 ここに女の子はにげてこなかったかね。

少年 来ましたよ。

乙 どこへ行った。

少年 あっちのほうへにげてゆきましたよ。私を見たらびっくりして、あの森のなかにとびこんでゆきましたよ。

丙 うそついたら承知しないよ。

少年 ぼくはうそなんかつきません。

(あらくれ男、森のほうへゆく。)

少年 (家のほうへゆき) 早くいまのうちにいま来たほうへにげていらっしゃい。

少女 ありがとう。

少年 いい所を知っていますから、ぼくが教えてあげましょう。(ふたり退場。)

(少年まもなくもどって前のとおり川岸に立つ。)

甲 乙ふたりもどってくる。)

甲 おまえはうそをついたな。

少年 いいえ。ぼくはうそなんか言いませんよ。

甲 いまおまえがむすめといっしょにかけてゆくを見ただぜ。

少年 ぼくはさっきからここにいます。

乙 うそつけ！（なぐる。）

甲 正直に言わないか。

少年 ぼくはほんとうにあの森ににげこんだのを見たのです。

乙 うそをつくところだぞ（また打つ。）

少年 ぼくは知らないことは知りません。

乙 強情っぱり。（また打つ。）

甲 ああ、あすこに家がある。あれをひとつさがしてみよう。

乙 まあさがしてみよう。しかしこいつがにげるといけないからゆわいつけてやろう。

甲 そうしよう。（甲乙少年をゆわいつけ、家のほうへゆく。）

乙 あいつが知らないわけではないと思うのだがな。

甲 あいつは殺したって白状しないという顔していたよ。

乙 ほんとうにああいうなきつらをするやつは、強情っぱりだね。（手あたりしだいにもものえだを折る。）

（家をさがし出てくる。）

乙 おまえは知っているのだろう。白状しないと承知しないぞ。

少年 だからぼくは正直にあの森へ行ったと言ったのです。

乙 まだ強情はるつもりだな。（ものえだをとって打つ。）

少年 知らないものは知りません。

甲 強情はると殺すぞ。

少年 いくら殺されたって知らないものは知りません。

（丙、丁、出てくる。）

甲 いたか。

丙 どこにもいない。

乙 こいつがうそついたと思うのだ。

丁 きつとうそつきあがったのだね。子供だと思つてばかにしたのが、こっちの手ぬかりだった。

甲 しかしまだ遠くにはゆかないと思うのだ。きつこの近所にかくれていると思うのだ。

丙 さがすだけさがしてみよう。そう遠くへは行くわけではない。

(みなさがしにゆく。)

甲 (乙と登場) やはりいいない。どうもこの家があやしい。ほかに行く所はない。ひとつこの家のゆかをはがしてみよう。

乙 天井てんじょうにいるかもしれない。

(家のなかをでたらめにさがす。)

丙 (丁と登場) おまえはだれとこの家にいるのだ。

少年 にいさんといっしょにいます。

丙 にいさんはどこへ行った。

少年 山へゆきました。

丁 かりに行ったのか。

少年 いいえ、ももを植えに行ったのです。

丙 ももを植えに。

少年 ええ。

丁 この山のももは全部、おまえの兄が植えたのか。

少年 そうです。

丙 うそだろう。こんなにももがひとりで植えられてたまるものか。

少年 二十年以上かかったのです。

丁 そんならおまえはあの評判のももの仙人せんじんの弟か。

少年 そうです。

丙 ももを命よりも大事にしているというのはほんとうか。

少年 ほんとうです。

(甲、乙出てくる。)

甲 見つかったか。

丙 見つからない。

甲 あの小僧こそうがどうしても知っていると思うが。

丙 ぼくはきつと、こいつの兄きの、もも氣ちがいが、

山へつれて行ったのだと思う。

甲 もも氣ちがいが。

丙 あの評判の桃仙とうせんというのが、ここに住んでいるのだそうだ。

甲 そうか。おまえのにいさんはどこへ行った。

少年 山へゆきました。

甲 何しに。

丁 ももを植えにだつてさ。

乙 のんきなやつだな。

丙 きつとそいつが、むすめをかくしているのだと思うのだ。そいつをつかまえればきつとむすめの居所がわかるにちがいない。

甲 そうにちがいない。そいつを見つける。

丙 おまえのにいさんはどこの山へ行った。

少年 ぼくは知りません。

乙 また強情はるな。(打つ。)

甲 さがしてみよう。

丙 さがそう。こんなわからずやを相手にしたってしかたがない。

(みな、退場、しばらくして男をつかまえて登場。)

男 おまえはむすめをほんとうに知らないのか。

少年 知りません。あの森の中にはいったと思うのです。

男 そうか。この人たちはそのむすめをおれがかくしたと言うのだ。そしてそれを白状しなければ、このももをのこらず切ってしまうと言うのだ。知っているなら言ってくれ。

少年 ぼくは知らないのです。

男 そうか。それならこのおれの二十何年の苦心がなくなってもいいと言うのだな。

少年 知らないものはしかたがありません。

男 そうか。おまえがそう言うのならほんとうに知らないのだろう。私は二十何年も、もを愛してきました。しかしこれも運命でしょう。もをのこらず切ってください。私は知っていればかならず言いますが、知らないものですからしかたがありません。

甲 よろしい。それならあのもををひとつ切りたおそう。乙 方がいいだろう。

(丙、家へ行ってのこぎりを持ってき、いちばん美しい木を切ろうとする。丁は剣をぬいて男と少年を見はりしている。)

男 その木だけは許してくれ。

甲 切りたおせ。

(切りだす。)

男 おまえはほんとうに知らないのだな。

少年 知りません。

男 ああ、私は自分を切られるよりつらい。私は毎日あ

のもの、木をさするのをたのしみにしていた。

少年 おにいさん。おにいさんのお気持はよくわかります。

男 その木を切るのはよしてくれ。それを切りたおすくらいならこのおれを殺してくれ。

少年 おにいさん。そんなことをおっしゃるものではありません。おにいさんが生きていらっしゃれば、まだどんな木でも植えることができます。

男 おまえはそう思っているのか。おまえは、もにはたましいがないと思っているのか。ももの木をほんとうに愛する気持はおまえにはわからないのだ。

少年 それだって、おにいさん、おにいさんの命にくらべたら、ももの木がなになりましょう。こんなにたくさんももの木があるじゃありませんか。

男 いくらあったって、あのもものは、あのもものだ。ほかのものではない。あの枝ぶり、あの花のさきかたはほかのものにはできないことだ。それにおまえには、ものなき声が聞えないのか。ももの木から流れ出る血が見えないのか。あの全身をふるわしているすがたは

あわれとは思わないのか。私の生命のこもっているあのもの、木がたおされるのをなんとも思っていないのか。

少年 私はおにいさんに同情しています。

男 だがおまえにはおれの気持はわからないだろう。わかればむすめのいる所を知らせてくれるはずだ。

少年 知っていれば知らせます。

男 ほんとうに知らないのか。

少年 知りません。

男 (丁に) やはり、弟はほんとうに知らないと思います。

丁 知らないわけではない。あのむすめの足でそう遠くへゆくわけではない。おまえがあの林のなかのどこかにかくしてきたにちがいない。

(ももの木、切りたおされる。花が流れにたくさん散る。)

甲 さあ、まだ白状しないか。しなければこの木を切るぞ。

男 知っていればいいです。知らないことは、言えませ